

環境時代

環境時代を予感しつつ、地球環境にやさしい工法を求めて。



社会の大変革のなかで

一九九八年、日豊商事は建材販売の業務を完全に停止し、クラウン30ビルを中心とした不動産関連の事業会社として新たな道を歩むことになる。これにより、日豊グループは豊建を核としたグループへと再編される。資本金も四〇〇〇万円に増資し、財務体質をより強固なものにした。さらには、日豊商事から引き継いだ建材販売からの撤退を二〇〇〇年に敢行し、少数精鋭の体制に向かって突き進む。そのころからトヨタ関連の大型改修工事にも恵まれ、経営全般に改善が見られるようになる。

社会もミレニアムの只中であつて、ダイナミックに動いていた。一九九九年にはE.U.圏の単一通貨ユーロが導入され、日本では金融ビッグバンがスタートした。コンピュータの誤作動が懸念された二〇〇〇年問題も杞憂に終わり、二世紀はIT色で幕を開けた。世はまさに本格的なインターネット時代、IT技術が産業や経済を牽引する時代となったのである。

そのようななかでも、豊建の「愚直さ」は変わらない。常に前向きに、質のいい仕事をこなすことに精を出す。二〇〇〇年には星ヶ丘立体駐車場、JAF中部本部、小糸製作所豊田工場を、〇二年には豊橋市資源化センター、名鉄一宮ビルを、〇二年には名城大学天白キャンパス、星ヶ丘テラス、ラクーナ蒲郡などを手がける。

環境時代への取り組み

かけがえない地球を守るために、真摯に環境問題に取り組むことは企業の社会的責任でもある。豊建では、地震による防災に大きく関係する地盤改良工事や、狭く工事現場での施工を可能にする環境に優しい杭工法のE.A.Z.E.T.工事で、その実績を上げている。

また、産廃分野にも進出し、移動式汚泥処理工事を展開したこともあつたが、その処理能力とコストのバランスが悪く、普及するまでには至らなかった。しかし、その発想は画期的なものであり、豊建の歴史にはぜひとも刻んでおきたい。これは、建設工事が複雑多様化するなか、人と地球にやさしい環境づくりを考えたクリーンリサイクルシステム(CRS)を開発し、建設現場で産業廃棄物として処理されている汚泥をその場で無公害で再利用が可能な土と水に変えるものである。独自技術の開発や導入は豊建の得意分野であり、今では使用頻度が少なくなつてしまつたが、基礎杭頭部を無破壊・無亀裂に処理するPCカッターを真っ先に導入したのも豊建である。

資源の有効活用と自然環境の保護を基本理念のもと、豊建は建設資材などの使用にあつてもリユースリデュースリサイクルの3Rを推進し、次世代の環境づくりに貢献していく方針である。

新しい仕事にチャレンジ

株式会社大豊 代表取締役
堀田 裕次

豊建基礎事業部様と仕事をすべくようになり、大変多忙な、しかし充実した毎日が始まりました。中でも、建屋内工事に対応できる重機の開発・導入をはじめ新しい施工にチャレンジする機会に恵まれたこと、そして、安全意識の向上や品質管理など厳しい指導を受け、手慣れた仕事に「喝」を入れたことは、弊社にとって大きな転換期でした。



既製杭工事



EAZET工事



センチュリー豊田ビル



INAX高岳



佐鳴学園



コメ兵



名鉄一宮ビル



豊田合成 平和町工場



豊田自動織機/東知多702工場

星ヶ丘テラス